

ベビーフードに関する実態調査

母子保健研究部

水野清子

染谷理絵

竹内恵子

要約：近年における女性の社会進出の増加と共に母親の就労率は増加し、乳児の食生活を取り巻く環境や母親の「食」に対する価値観は以前に比べかなり変化してきている。これまでの調査や近年における厚生省の調査においても、ベビーフードの使用は増加していた。6～18か月児を持つ母親1167名を対象に、ベビーフードに関する調査を行ない、ベビーフード製品の開発に役立てたいと考えた。結果の概要は以下の如である。

①27%の母親はベビーフードを週に3回以上使用しており、特に離乳初期および中期ではその割合は57%、40%であった。②離乳食調理に対する負担感とベビーフードの使用頻度との関係は明らかではなかった。③77%の者は店頭で商品を見て購入しており、製品を使うことに1/5の者は後ろめたさを感じていたが、約半数は使うことに抵抗感を感じていなかった。④母親の多くは製品を使い分けており、外出時に最もよく使用し、次いで手作りの補助として使用していた。特に離乳初期、中期ではこの割合が高かった。⑤製品の安全性、栄養面に対する期待が首位を占めていた。今後、厚生省発表の「ベビーフード指針」に基づいた母親の期待に添える製品の開発を望みたい。

見出し語：ベビーフード、ベビーフードの使用状況、ベビーフードの使用に対する母親の気持ち、ベビーフードに対する期待、

A Survey of Ready Made Baby Foods

Kiyoko MIZUNO, Rie SOMEYA, Keiko TAKEUCHI

Summary: We examined 1,167 mothers with 6-18 month old babies who came for baby health checkups about how they used ready made baby foods (BF), how they felt about using them, why they bought them, what were the reasons of choice, what kind of food they used at what occasion, what they expected and so on.

The frequency in using BF was high for babies in the first and second stage of weaning. We can't say necessarily that mothers who felt it was difficult to prepare baby food frequently used BF or not. Only one fifth of the mothers felt guilty about using BF. Half of them didn't feel anything against using BF. Many mothers used BF in supplant to their own cooking during the first and second of weaning, and as instant food when going out with their babies in the third and final stage. Many mothers expected BF to be safe and nutritious.

We expect makers to develop products based on the "Guide for Ready Made Baby Foods" by the Ministry of Health and Welfare.

Key words: Ready made baby foods, Frequency in using ready made baby foods, Filling about using ready made baby food, Expectation for ready made baby food

I. 緒 言

近年における食品加工技術の進歩と外食産業の目覚ましい発展、それに母親の就業率の増加などが相まって、乳児の食生活を取り巻く環境や食生活に対する保護者の意識は、以前に比べかなり変化してきている。乳児の出生数は1970年代に比べ現代ではかなり減少しているものの、ベビーフードの生産量はかなり増加しており¹⁾、従って1人当たりの乳児のベビーフード消費量はかなり増えているものと推測される。これまでの調査においてもベビーフードはかなり使用されていることが認められており²⁾、また、平成7年乳幼児栄養調査³⁾ではベビーフードをよく使用した者は13.8%、時々使用した者は52.2%で、この両者を合わせた割合は10年前に比べ約18%増加していた。今後の母親の就業率の増加、「食」に対する価値観の変化などにより、ベビーフードの使用は増加するものと予測される。そこで、離乳期乳児を持つ母親を対象に、ベビーフード製品に対する期待、種類による使い分状況を調査し、今後のベビーフード製品の開発に役立てたいと考えた。

II. 研究方法

総合母子保健センター保健指導部に来部した6か月から18か月児を持つ母親を対象に、栄養相談終了時にベビーフードに関する調査協力を依頼し、1167名から回答（有効回答）を得た（回収率77.8%）。対象児の月齢区分は改定「離乳の基本」⁴⁾のそれに従った。調査対象数は6か月 110名、7～8か月 269名、9～11か月 426名、12～15か月 263名、16～18か月 99名である。

調査内容はベビーフードの使用状況、使うことに対する気持ち、購入のきっかけおよびポイント、種類の使い分け状況、製品に対する期待、離乳食調理などである。

III. 結果および考察

1. ベビーフードの使用頻度

ベビーフードの使用頻度を表1に示す7段階に区分して調査した。全体についてみると約32%の者はベビーフードを殆ど使っておらず、週に1～2回または3～4回使用する

る者はそれぞれ13%前後、毎日使用する者は6～8%であった。月齢別にみると離乳初期および中期に使用割合が高かった。筆者ら²⁾が全国レベルで行った調査と比較すると、本対象の方が幾分使用頻度が高かった。今回の対象の居住地が大会おおよびその近郊であったために、種々のベビーフード製品の入手が容易であることが関与していると思われる。

離乳食作りに対する母親の状況を表2に示す。離乳食を作るのが楽しいという者は26.4%、時々苦になる者が半数、苦になる者は3.2%、どちらとも言えない者は20.2%であった。ベビーフードを殆ど使わない、または、週に1～2度使う者に比べ週に3～4度以上使用する者に離乳食作りが幾分負担になっている様子が見られたが、顕著な差はみられなかった。

表2 ベビーフードの使用頻度と離乳食調理 (%)

	楽しい	時々 苦になる	苦になる	どちらとも 言えない
全 体	26.4	50.2	3.2	20.2
殆ど使わない・ たまに使う	27.4	48.8	2.8	21.0
週に1～2度使う	25.8	49.7	1.9	22.6
週に3～4度使う	24.5	57.2	5.4	12.9
殆ど毎日使う・ 毎日1～2品使う	23.2	49.9	4.3	22.6

注：「全部ベビーフード」の者は少ないので除外した

また、対象児の離乳の進行状況を見ると、全体の83.8%は大体順調に進行しており、時々困ることがある者は

表1 ベビーフードの使用頻度 (%)

月 齢 (か月)	全 体	6	7～8	9～11	12～15	16～18
解 答 数 (人)	1160	110	267	424	262	97
殆ど使わない	31.9	16.4	13.5	22.4	56.1	77.3
たまに使う	27.5	16.4	28.8	32.3	26.3	18.6
週に1～2度使う	13.4	10.0	17.6	17.2	8.8	1.0
週に3～4度使う	12.8	18.2	18.4	15.1	5.0	2.1
殆ど毎日使う	6.3	16.4	10.5	5.0	1.9	1.0
毎日1～2品使う	7.8	22.7	10.1	8.0	1.9	0
全部ベビーフード	0.3	0	1.1	0	0	0

15.0%、順調に進んでいないは1.2%に過ぎなかった。離乳が順調に進行していない場合にベビーフード製品に依存している傾向が認められた。

2. ベビーフードに対する感想と購入時のポイント

ベビーフードの使用に対する感想、購入のきっかけおよび購入時のポイントについての結果を表3に示す。ベビーフードを使用することに後ろめたさがあると答えた者は全体の1/5、約半数の者は使用することに抵抗感はないという。しかし、約1/3前後の者はベビーフードはおいしくないと評価し、価格が高いと答えていた。また、安全性を気にする者が20%認められた。現在、ベビーフード製品の塩味調味はコーデックス（WHO/FAOの下部組織）により、食塩相当量で0.5%を越えないこととされている。この濃度は成人の塩味調味の約半分量に相当する。それゆえ、母親にとってベビーフードの塩味はかなり薄く、それがおいしくないとという評価に結びつくものと思われる。

表3 ベビーフードに対する感想、
購入時のきっかけ、ポイント (%)

調査項目		全 体
ベ ー ビ ー フ ー ド に 対 す る 感 想	解 答 数 (人)	1151
	抵抗感はない	51.9
	おいしくない	31.8
	価格が高い	29.0
	後ろめたさがある	21.0
	安全性が気になる その他	20.0 12.6
購 入 し た か け	解 答 数 (人)	1131
	友人に勧められて 店頭で見かけて 雑誌で見て 試供品を買って その他	14.9 76.7 21.1 10.3 19.2
購 入 時 の ポ イ ン ト	解 答 数 (人)	1128
	価格	12.9
	形態	42.4
	商品内容	96.7
	パッケージ その他	2.0 4.6

77%の者は商品を店頭で見えて購入していたが、雑誌による情報、友人の勧めによる者も21%、15%みられた。大部分の者は商品の内容を基盤で購入していたが、ベビーフードの形態を重視する者が42%認められた。

ベビーフードの使用頻度とベビーフードに対する感想との関係を見ると（表4）、ベビーフードの使用頻度が高くなるにつれ、製品の使用に対する抵抗感のある割合は減少し、味に対する評価も緩慢化しているが、使用頻度の高い者も頻度が低い者と同様に、価格が高いことやベビーフードを使用することに対する後ろめたさを感じていた。特にベビーフードの使用量が多くなれば、価格が気になることは当然であろう。

3. ベビーフードの種類による使い分け状況

製品の使い分け状況を表4に示す。全体についてみると85%の母親は製品を使い分けていた。その分け方は外出時に使う割合が最も高く、次いで手作りの補助として使用するであった。月齢別にみると6か月および7～8か月でも外出時に使用する者が多かったが、9か月以降に比べ手作りの補助として使用している割合が高かった。ほぼ全国的なレベルでの調査²⁾によると、献立に変化をつけるまたは栄養バランスをとる手段に使用する者が多かった。今回の調査において、特に9か月以降離乳食回数が1日3回になり、また長期の外出にベビーフード製品を使用する者が僅かであるが増加している現状を考えると、今後、ベビーフードを主として、乳児の栄養必要量を充足できる製品の開発が望まれる。

4. ベビーフードに対する期待

ベビーフードに対する母親の期待をみると、製品に対する安全性、栄養面に対する期待が1位および2位を占め、3位にはおいしさが挙げられていた。表3に示したように、対象中29%の者はベビーフード製品は価格が高いと回答していたが、価格に対する期待を挙げる者は然程多くなかった。ベビーフード製品はそのタイプによりかなり価格に差が見られる。今回の調査では当保健指導部に来部した母親を調査対象としたが、保健所または市町村の保健センター等で乳児健康診査を受けている母親を対象にした場合には、この比率は変動するものと思われる。

平成5年、厚生省より「ベビーフード指針」⁵⁾が出された。その中には製品の安全性、栄養、物性に関するものが示されている。しかし、現在、市販されている製品の中にはこの指針を満たし得ないものも見受けられる。また、現在、製品のみで栄養量を充足した離乳食献立を作成することは難しい⁶⁾。今後、この指針を基に新しいベビーフード製品が開発されるものと思われるが、乳児

表4 ベビーフードの使用頻度とベビーフードに対する感想 (%)

	抵抗感 なし	おいし くない	価格が 高い	後ろ めたさ ある	安全性が 気になる	その他
殆ど使わない・ たまに使う	27.1	23.8	16.6	12.7	12.9	6.9
週に1～2度使う	37.4	12.6	18.9	9.7	12.2	9.2
週に3～4度使う	35.0	12.4	17.7	15.7	9.6	9.6
殆ど毎日使う・ 毎日1～2品使う	40.8	7.9	20.4	12.8	10.6	7.5

注：「全部ベビーフード」の者は少ないので除外した

表5 製品の種類による使い分け (%)

月 齢 (か月)	全 体	6	7～8	9～11	12～15	16～18
解 答 数 (人)	1112	106	259	411	247	89
使い分けをしない	14.7	22.6	14.3	12.9	15.8	12.4
使い分ける	85.3	77.4	85.7	87.1	84.2	87.6
自宅で使う	35.5	43.2	36.9	38.8	29.3	25.6
外出時に使う	81.2	72.8	82.0	83.5	78.8	84.6
手作りの補助として	67.2	75.3	80.2	68.2	55.3	50.0
長期外出時に使う	31.1	22.2	29.3	32.4	33.2	34.6
その他	3.6	2.5	3.2	3.6	4.8	2.6

の栄養量を満たし、また乳児を持つ母親の期待を満たし得るものが製造されることを期待したい。

IV. 結論

保健指導部（現母子保健科）における乳児健康診査に来部した6か月～18か月児を持つ母親1167名を対象に、ベビーフードの使用状況、使うことに対する母親の気持ち、購入のきっかけおよびポイント、種類の使い分け状況、製品に対する期待などについて調査した。

ベビーフードの使用頻度は離乳初期および中期の乳児に高かったが、離乳食調理が苦になる母親に必ずしもベビーフードの使用頻度が高いとは言えなかった。ベビーフード製品を使用することに後ろめたさを感じていた母親は1/5に過ぎず、半数の者は製品を使用することに抵抗感はなかった。ベビーフードを離乳初期、中期では製品を手作りの補助として使用し、後期以降では外出時に使う者が多かった。母親の多くは製品に対し安全性と栄養面に対する期待を挙げていた。

今後、「ベビーフード指針」（厚生省）に基づいた製品の開発を望みたい。

調査を行うに当たり、協力いただいた愛育病院母子保健科 鍵 孝恵氏に感謝いたします。

文献

- 1) 社団法人 日本缶詰協会：ベビーフードの生産量、平成6年度資料。
- 2) 水野清子他：ベビーフードの使用と離乳の進行状況．小児保健研究，52(6)：639～644，1993。
- 3) 厚生省児童家庭局母子保健課：平成7年乳幼児栄養調査結果の概要．1997年2月。
- 4) 厚生省児童家庭局母子保健課：改定「離乳の基本」．1995年12月。
- 5) 厚生省生活衛生局食品保健課：ベビーフード指針．1995年6月。
- 6) 水野清子：15年ぶりに改定された「離乳の基本」．キュービーニュース，第271号，1996。